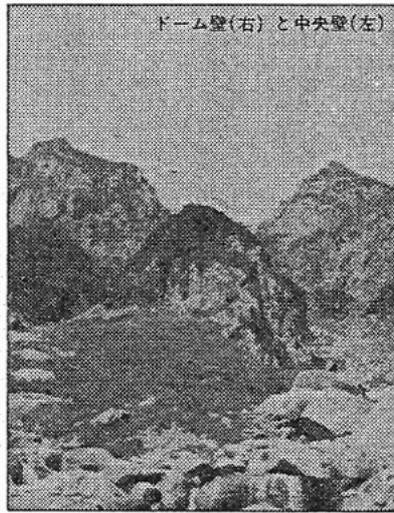


笠ヶ岳穴毛谷二ノ沢の岩場④

登攀倶楽部・岐阜

二ノ沢では比較的広くて大きな沢である本谷。そのツメには合形状をした中央壁と、ドーム壁が迫力ある姿でそそり立ち、二ノ沢岩壁群の中心にふさわしい景観を見せている。フェイスの美しい中央壁は、人工登攀もまじえて中央フェイスルートと、クラックが楽しめるドーム壁では、左フェイスと中間リッジに、それぞれルートを開くことができた。



ドーム壁(右)と中央壁(左)

二ノ沢本谷(旧称||中ノ右俣)は二ノ沢の中央部を占め、幅も広く地形的にも、登攀的にも中心的存在である。また本谷は中央壁やドーム壁へのアプローチでもある。右俣の岩場へは中間尾根を越えれば行けるし、登攀後の下降ルートとしても重要である。

本谷は「登攀ノ宿」の岩小舎のすぐ上で中俣谷と分かれ、広いガレ場を登る。岩が不安定できわめて歩きにくい。流水は犬齒ルンゼ入口付近まである。右俣谷へ行く場合は犬齒ルンゼ入口の対岸、中間尾根草付斜面を登って越え、

右俣側へ下る。本谷をつめて行くところの滝があり、下の滝は二段で四〇メートルくらいだ。これを登るには滝の右側を上る。三級くらいのクライミングで攀じる。上の滝は左側にルートをとり草付を登るが、ぐずぐずの草付で悪く、約二〇メートルの登攀になる。この滝の上からはドーム壁の取付へ行くことができる。稜線へ出るには細くなった沢筋にそって行き、最後は草付をつめて稜線へ出る。稜線に出ると稜線上に一つ、二ノ沢側に一つ、岩屋がある。

下降する時は二つの滝をアプザイルする。上の滝が約二〇メートル、下の滝が

四〇メートルくらいですむ。

〔中央壁〕

本谷右岸にそびえる中央壁(旧称||右峰)。岩壁は高さこそ「あけぼの壁」より少し小さいが、幅の広さ、美しいフェイスをみても、二ノ沢の王様の存在の岩壁といつていい。スケールの大きい広大な中央壁は、新穂高ロープウェイの千石駅の正面からも迫力ある岩壁として望むことができる。

中央壁を大別すると左手から中央に大きなジエードルのあるフェイスと中

●中央壁中央フェイスルート

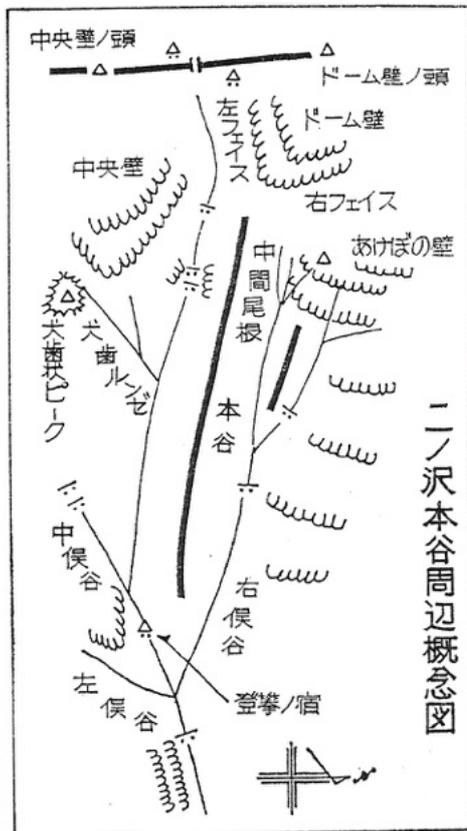
一九七九年八月十五日〜十六日

パーティー||加納義則、宇都宮行志

十五日、中央フェイスの取付へ向かうべく犬齒ルンゼの右俣を登って草地のバンドにでる。小さな花が咲いていて見晴らしもいい。美しいテラスで中央壁の取付にふさわしい所である。本谷から見てほぼ真ん中の一枚岩のフェイス中央部がよいルートになるうと期待して取りつく。

下部フェイスは高度差約一〇〇メートルで中間部に緩傾斜帯がある。また上部フェイスも約一〇〇メートルが核心部で、上下フェイスとも垂直で人工登攀はやむ

二ノ沢本谷周辺概念図



をえない岩場である。

下部フェイスは一枚岩でほとんどリスがなく、ボルト連打になるが、左とも横へ逃げてしまっはいいルートにはならない。われわれは美しいフェイスの中央部をボルト連打で登ることにする。いまだきボルト連打ルートなどと顔をそむける人もいようが、フリークライミングが盛んな今日だが、人工登攀もまたフリークライミングに優るとも劣らないすばらしいプロセスがあるとわれわれは思っている。たしかに人の打ったハーケンやボルトを追いかけたり、スケールの小さなボルト連打では無理かもしれないが、自分がその岩壁にふさわしいと思う登り方をすればいいと考える。

岩のへこみ、岩のしわ、その他一つ

一つをどのように利用していくかが、その人の創造性だ。たとえ人工登攀といえども、スケールの大きい岩壁では省エネで登らねばならず、ルートのとり方のうまさ自然との対話であり、そのプロセスを楽しむのがクライミングゲームのおもしろさであると思う。

きょう帰る木村がさざなみのように小さく、波うった特徴のあるスラブを小さなホールドを拾って直上していく。すぐに人工登攀になる。リスのほとんどない一枚フェイスだけにボルト連打である。約二〇分登った所で木村は帰る時間が来て下降。宇都宮がかわってリードする。相変わらずボルト連打で

ほぼザイルがいっぱいになるというのにテラスどころかスタンス一つない。止むなく人工テラスを作るのにボルト三本を埋める。

加納はユマリングで登る。とはいっても自分の荷物を担ぎ、宇都宮の荷を腰にぶらさげのユマリングは決して楽ではない。人工テラスでは登攀具の受け渡しもままならない。ボルト打ちはいやだなと思いつつ観察すると、あるかないか分からない細いリスが一条、左へカーブしている。それにそってナイフブレードをたたきこむ。一歩二歩しかはいらないナイフブレードを連打してゆくと、リスは少しずつ広がり、普通サイズのハーケンが使えるようになる。

途中にこのフェイスで唯一一つのスタンスがあり、ピナクル状の岩塔にバンスで立つてのハーケン打ちは何度も躊躇した。登るにつれリスは広がり、厚刃ハーケンからアングルハーケンに替える。しかしその上は突如としてリスが消えてしまった。

仕方なくボルト打ちかと思って、辺りを見まわすと左手に二倍くらいトラバースすればフリーでいけそうな箇所がある。振り子状にトラバースを試みると、下にいる宇都宮が文句をいって

くる。彼はこのフェイスを直上する心積もりでいたのでおもしろくないらしい。加納はさつきとトラバースし、右上するバンド状の緩い部分を登って大きなテラスへ出る。ちょうど屏風岩の扇岩テラスのような壁から離れた岩の間にいいテラスがあった。

宇都宮はあきらめきれないのか、このフェイスを直上しようと、加納の打ったアングルハーケンの上にボルトを一本うめたが、二本目でジャンピングの錐がおれてしまい、諦めてゴボウで登ってきた。

三ピッチ目、左上するバンド状の傾斜の緩い部分を登ると下部岩壁は終わり、中間緩傾斜帯に出る。上部フェイスも一〇〇分ほどありそうだ。時間は午後三時をまわっている。

四ピッチ目、ザイルのいらぬような緩い斜面を四〇分ほど登ると、上部フェイスの下部、上部フェイスにもたれかかったような岩の間にチムニーがありフリーでいけそうだ。

五ピッチ目、チムニー登りから途中のクラックにナツで二カ所ほどプロテクションをとり、四〇分ほどチムニーの上の大きな岩のテラスに着く。

六ピッチ目、右手の草付を二〇分ほど

ど右上げみにトラバースして広いテラス着。上部フェイスも半分ほど登ったことになる。一八時に近く、そろそろビバークの用意をする。

七ピッチ目、中央壁の右側、草付の多い部分を登ると、古いハーケンがあった。たぶんボルトのない時代のもので、その上部はどうしてもハーケンが打てず、涙をのんで下ったのだろう。最高到達点にはハーケンに捨縄と鉄カラビナがのこされていた。

ここからは垂直に近い浅い凹角状をフリーで直上する。腕力を使う登攀である。洞穴状に見えた所は庇のみでテラスはなく、右手へ回りこんだ所に小テラスがあった。ラストの加納が登るころにはもう真っ暗になっていた。

小テラスでビバーク。水が不足で喉の渇きをいやす少しの水しかのめない。

十六日、本日も晴天。正面に新穂高ロープウェイの千石駅が見える。八ピッチ目をなんとかフリーでいこうと宇都宮が左へトラバースしたり、急な凹角に挑戦したが、結局ボルト打ちとなる。

ボルト四〜五本をうめた所でジャンピングの錐がまた折れてしまう。それまでホープ製のジャンピングの錐はす

ぐおれてしまい、エバニュー製のジャンピング一本で十数本のボルトを打ってきたが、最後のエバニューも折れてしまった。まだ数本のボルトを打たなければ登れそうもなく、やむなく下降の準備にかかる。

荷物をまとめてみるとテラスの片隅におれたジャンピングの錐が落ちており、ホルダーにつけてみるとなんとかなりそうである。

気をとり直し、やるだけやってみよう。最高到達点に登りジャンピング

の錐を折らないように、静かに穴あけ作業をする。二本打ったところでリスを発見、ハーケン一本で傾斜の緩いスラブへ出る。核心部は終わったのである。

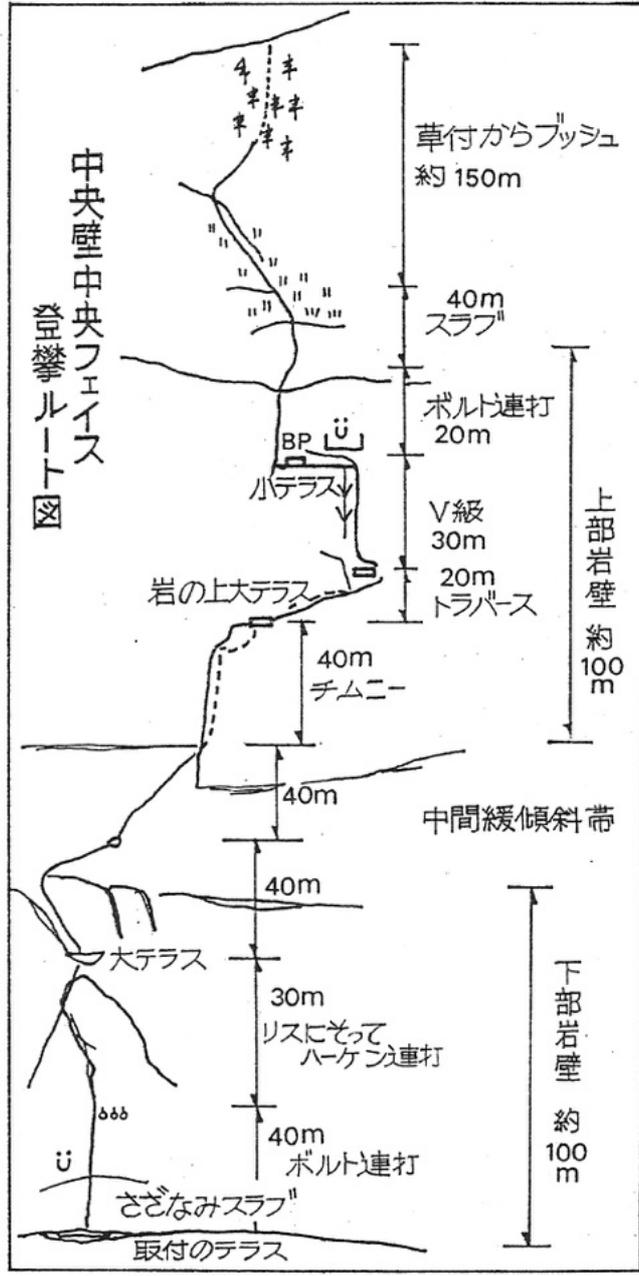
緩いスラブの真ん中にボルト一本でブレイピンを作り、荷物を吊り上げる。九ピッチ目、緩くなったスラブを登って草付に出る。

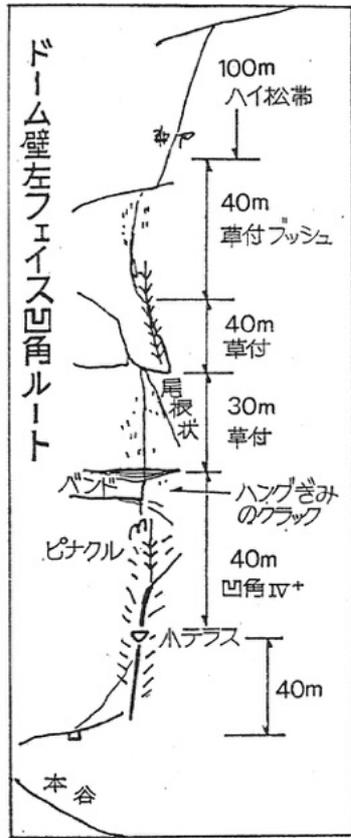
この草付もけっこう急勾配で、いやな草付をしばらく登ってブッシュに入ると、ノーザイルで登るには少々手強い

が草付へでた所でアンザイレンを解いた。稜線に出ると反対側の下に中央ルンゼが見える。痩せた稜線をしばらくいくと広いハイマツ帯となり、雷鳥岩のとなりのピーク（中央壁ノ頭）に出た。本谷を下り、本谷の水場で水をがぶ飲みして一息ついた。

後記

今回の登攀は中央フェイスのほぼ真ん中を直上でき、人工登攀とフリークライミングのまじった、変化にとんだ





楽しい登攀ができた。

人工の部分はハーケン、ボルトをすべて残置してあるので新穂高を朝早く出れば一日で完登できるだろう。

今後、中央壁でもおもしろそうなのは左側にある大きな特徴のあるジエードルのフェイスである。ジエードルとその上にはふさがるようにして覆いかぶさるハングの登攀だ。これは豪快だろう。核心部一五〇〜二〇〇級の人工登攀が中心となろう。

(記・加納義則)

〔ドーム壁〕

本谷をはさんで左側が中央壁、右がドーム壁で、二つ並んだ様子はなかなか迫力がある。ドーム壁は取付点が高く、登攀のスケールは中央壁の半分くらいとみていい。

ドーム壁は現在まで本谷側の左フェイスに一本、右側の右フェイスと左フェイスの中間リッジに一本のルートを開いたので、それを紹介しよう。

●ドーム壁左フェイス凹角ルート

一九八二年八月十三日
パーティー||加納義則、安井潤一、成瀬一基

新穂高からのんびり登って岩小舎へ着く。ここで大休憩。まだ時間が早いので、やむなく、またのつたら、のつたら登りだす。本谷を登って中央壁の下まできて、ゆっくり時間をかけてBCを作り、さらにゆっくり昼食にする。それでも時間は昼を少しまわっただけである。ぼけっとしていても退屈してしまふ。というのは今年も冷夏で二〇〇級以上の所はガスがかかり、ガスの中はしとしと雨が降っているから

である。天候がばつとしないので乗り気がしないのだ。

どこへ行くか相談しているうちに、「快適なクラックに登りたい」「それならドームへ」ということになった。ドームにはよさそうなクラックがいっぱいあるからだ。

先に木村、二階パーティーが出発していき、加納パーティーがその後を追うように出発する。先行している木村パーティーが見えず、加納パーティーは本谷の下の滝はノーザイルで、各自好きな所を登って、ドームの下へ出る。木村パーティーが見えず、右フェイスへ行ったのかどうかも分からない。右フェイスは時間的に無理だろうし、なにせ岩壁は雨でびしょ濡れになっている。

左フェイスはスケールは小さいが、おもしろそうな凹角がある。その凹角を目標して取りつくことにした。本谷から草付をトラバースし、岩壁基部の露岩にハーケンを二本打ってピレイ点にする。

一ピッチ目は容易な三級くらいの階段状を右上して凹角内へ入っていく。約四〇級で小テラス着。上は本を開いたようなコーナーになっていて傾斜も強く、おおいかぶさるような状態だ。

ガスっているからよけい不気味である。岩が濡れているので多目にプロテクションを取り、次々と現れるクラックにナッツをほりこんでフリーで直上する。コーナーは傾斜は強くても意外に登りやすい。ピナクル状の岩を強引に登ったり、細いクラックやハング気味のクラックなど変化にとんだおもしろい登攀を続ける。四〇級いっぱい草付の斜面へ出た。最後はプロテクションの取りすぎでザイルの滑りが悪く、腕力を使い果たして、這い上がった。

三ピッチ目、草付を直上し尾根状になった所のブッシュでピレイ。四ピッチ目は尾根を右へ回りこんで草付の凹角に入り四〇級ほど登ってブッシュでピレイ。次のピッチは凹角の傾斜は少し強くなったが、岩の割れ目から顔をだした灌木を頼りに直上して尾根状になった部分に出る。ザイルを解いてもよさそうだが四〇級いっぱいまで登る。ハイマツをこいでドームの頭へ出る。夕暮がせまりガスっているのによけいに暗い。急いで本谷を下る。

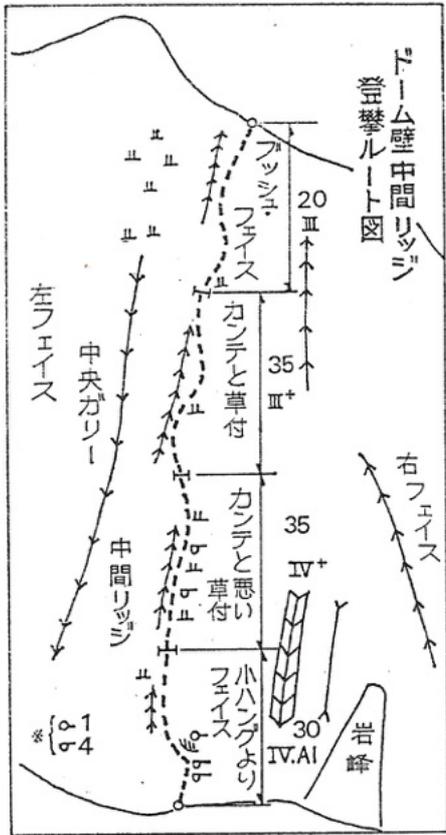
(記・加納義則)

●ドーム壁中間リッジ

一九八二年八月十三日
パーティー||木村智、二階寿人

朝からどんより曇っていて何となく
 気乗りがしないまま、新穂高を出発す
 る。六時四五分発。今回の目標は「ド
 ーム壁」である。昨年の夏、「ドリ
 ー」状態ダイレクトルートを開拓した
 後、次なる目標として取り上げたのが
 このドーム壁であり、秋以降、何回か
 足を運んだが、その度に雨に見舞われ、
 延び延びになっていたのだ。

岩小舎で昨年デポしておいたハーケ
 ン、ポルト類を回収し、本谷をつめて
 いく。途中、ベースキャンプを作ろう
 と思いつき、河原を整地したが、ごろごろ
 の転石はすぐぐずれてしまい、労ばか
 り多くなかなか整地できない。ようや
 くツェルトを張り、不要な物をここに
 残しドーム壁の偵察に向かう。



一二時発。本谷をつめていくと、途
 中に二〇分ほどの大滝が現れたので、
 これを避けて右の草付を回り込み、そ
 のまま草付帯を登る。急傾斜で部分的
 に垂直な部分もある草付の尾根を、草
 とブッシュを頼りに登るのは非常に緊
 張する。登っているうちに雨が降って
 きたが、ドーム壁が見えるところまで
 行こうということ、そのまま登り続
 ける。

中間リッジの基部に立つてみると、
 行けそうに思ったので、このまま登っ
 てみようということになる。一四時二
 五分登攀開始。

一P目、木村が右の凹角に取りつく。
 しかし、岩が濡れていて悪いらしく、
 かなり苦労していたが、結局あきらめ

て下ってきた。今度は左寄りのフェ
 イスにルートを求める。一カ所ハングが
 あり、左へまわり込むようにして越え、
 草付のフェイスを直上する。二P目は
 草付のいやらしいカンテを登る。ここ
 るどころに大きめのブッシュが生えて
 いて、これをブレイポイントに利用す
 ることができる。

三P目、草付のカンテが続く。徐々
 にブッシュが密生してくる。四P目は
 傾斜は緩くなり、ハイマツとブッシュ
 をかき分けるようにして二〇分ほど登
 るとドーム壁の上に出て登攀終了とな
 る。一六時四五分。

下降はクライムダウンと三回のア
 プザイルで取付に戻る。ここからド
 ーム壁の基部の草付のバンドを左ヘト
 ラパスして行くと、簡単に本谷に降り
 ることができた。本谷には二〇分ほど
 の大滝が二つあり、それらをアプザ
 イルで下降する。

本谷途中の、苦労して作ったピバ
 ーク地まで戻ってきたが、雨が降りそ
 うなのでこの場所を放棄し、岩小舎ま
 まで下ることになった。岩小舎着一九時四五
 分。

このルートは四ピッチ、一二〇分
 われわれはハーケン四本、ポルト一本
 を使用した。(記・二階寿人)

夏山アルバイト募集中

北アルプス 穂高岳山荘
 標高3000m、雲のじゅうたんの上でアルバイト生
 活……。あれこれと、とても忙しい夏の山小屋で
 すが、大自然の中で力いっぱい働いてみませんか？

〈募集要項〉

短期アルバイト 男子・女子
 期間 7月～8月 最低一ヶ月以上の勤務可能者
 長期アルバイト 男子 5月～10月
 女子 6月～10月

申し込み 写真添付の履歴書一通を下記へお送り下さい
 郵送先：岐阜県吉城郡神岡町東町504
 穂高岳山荘 今田 英雄
 TEL 0578-2-2150

—主峰赤岳を眼前に—

八ヶ岳

元祖 赤岳石室 (新築・通年営業)

赤岳山溪石室 ●風呂付 7%～8% (6・9・10月は土曜のみ)
 食事付宿泊の方

男女従業員・アルバイト募集 夏沢峠 こまくさ荘

山好きで明るい方
 ●長期の方 (1～2年以上) 美濃戸口 八ヶ岳山荘
 ●短期の方 (4月中旬～11月中旬) 通年営業
 (7～10月)

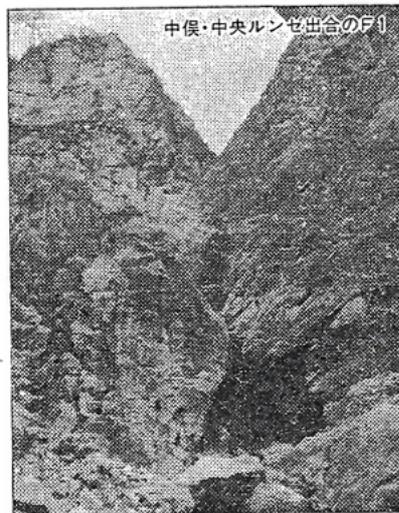
ご希望の方は履歴書・写真・期間を明記して下記へお送りください。

☎391-01
 長野県茅野市泉野 松澤純男 八ヶ岳山荘 ☎0266-74-2728・2755

笠ヶ岳穴毛谷二ノ沢の岩場 ⑤

登攀倶楽部・岐阜

中俣は四つのルンゼ（前ルンゼ、Aルンゼ、Bルンゼ、中央ルンゼ）から成り、それぞれに登攀をたのしめる。このほか明るいピナクル尾根と奥壁を有している。とりわけ奥壁は幅二〇〇呎・高距二〇〇呎のスケールだが、既登のルートは一本しかなく、これからどう開くかが大きな課題である。中俣下部には岩小舎があつて快適な宿になっている。



〔概説〕

中俣の岩場は二ノ沢以外の沢、つまり右俣と本谷そして左俣に比べると、かなり複雑な地形をなしている。右俣・中俣・左俣の合流点である三ツ俣から中俣に入ると、すぐ「登攀ノ宿」と呼ばれる大きな岩小舎がある。この岩小舎の上あたりから中俣を眺めると、沢の奥に「キバ岩」と呼ばれる特異な形をした岩峰が望まれる。

中俣は、岩小舎から一〇分ほどで本谷を右に分けてごろごろの転石の沢を登っていく。二ノ沢はどの沢も同様であるが、かなり荒れているので落石に注意して登らなければならない。しばらく登ると左に「前ルンゼ」の出合を見送り、さらに登ると滝の連続する廊下状になったゴルジュ帯となる。入り口に一〇呎の滝があり、続いて五呎の滝を二つ越すとゴルジュ帯を抜けて三つのルンゼの合流点に達する。左から「Aルンゼ」「Bルンゼ」さらに奥壁と中央壁を分けるように食い込んでい

るのが「中央ルンゼ」である。合流点には、「キバ岩」が二つの尖塔をもつてそそり立っている。右手には、キバ岩よりもさらに高く白っぽいハング帯を連続させた威圧的な犬歯状ピークが望まれる。このキバ岩の基部から左へAルンゼ、右にBルンゼが分かれている。Bルンゼはキバ岩の基部を右から巻くように入っていて、すぐ中央ルンゼを右に分けている。さらに登ると、右手に三つのピナクルが連続する「ピナクル尾根」がある。そして中俣最奥には、中俣最大のスケールを有する「奥壁」がある。この壁は中央ルンゼの左壁にあたり、幅約二〇〇呎、高距二〇〇呎を有している。

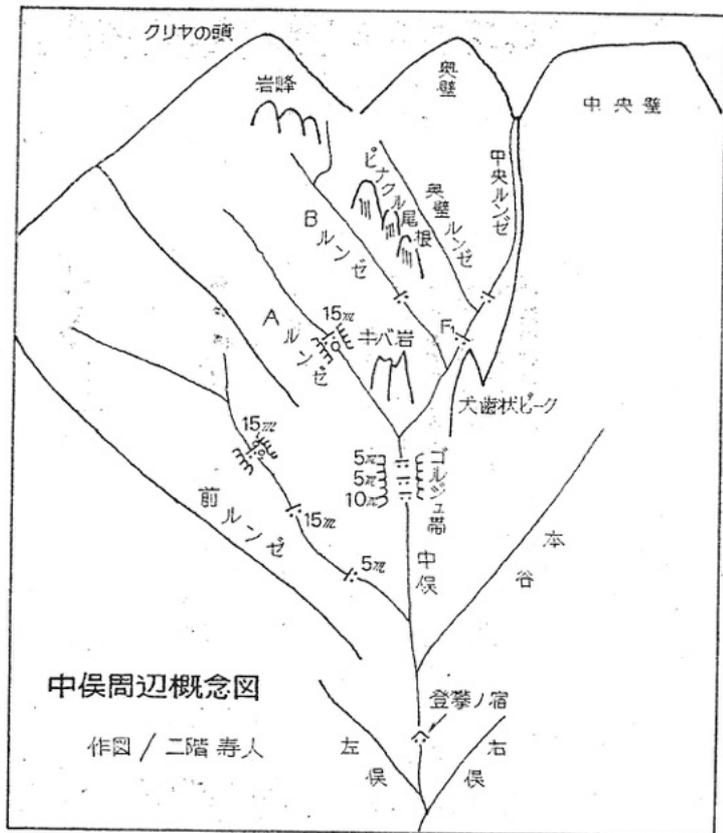
中俣周辺の岩場は、キバ岩の一部がやや脆いのみで全般的に草付が少なく岩も固い。アプローチは、岩小舎から前ルンゼ出合まで三〇分、さらにキバ岩基部の合流点まで三〇分である。

〔前ルンゼ〕

三ツ俣から中俣に入ると、すぐ大きな岩小舎があり、二〇〇呎ほど登った所で右手に広くて大きな本谷が一直線に主稜線まで突き上げている。ここを見送り二〇分ほど登ると左から前ルンゼが入っている。ルンゼと呼ぶにはふさわしくないほど傾斜は緩く、広い入り口になっている。

出合からは五呎の黒っぽい滝が望まれる。左岸は急な草付、右岸は階段状の草付の岩場になっていて、どちらからでも簡単に越えられる。この滝を過ぎると、ルンゼはすぐ右にカーブし、両岸から岩尾根が張り出して狭くなるところに一五呎の滝がある。右岸の階段状の草付の岩場を登ると上はガレ場になっている。転石に注意しながら登ると、両岸に岩壁の迫るゴルジュ帯となる。

ゴルジュ帯の出口には一五呎のチョククストンを二つ持った溜滝があるが、



中侯周辺概念図

作図 / 二階 寿人

この滝はかぶって直登は不可能と思われる。ルートはこの涸滝の少し手前の右岸にある岩場を少し登り、草付とブッシュを頼りにトラバース気味に滝の落口まで出る。

ここからルンゼは二つに分かれ、右の沢はすぐブッシュの中に消えている。本流は左の沢で、左へ大きく曲がり、草付の急な涸沢を登ると穴毛谷第一尾根から派生している支尾根に出る。

前ルンゼ出合から二時間半。

〔中侯ゴルジュ〕

前ルンゼの出合を過ぎ、中侯をさらに登ると、滝の連続するゴルジュ帯になる。入り口に一〇層の滝があり、五層の滝が二つあるが、いずれも容易で左右どちら側でも簡単に越えられる。ゴルジュ帯を抜けると、キバ岩の特異

な形の岩峰が現れ、AルンゼとBルンゼの合流点になっている。

〔Aルンゼ〕

Aルンゼは、出合からみると、すぐに正面にチョックストーンを持った一五層くらいの滝があり、ルンゼはそこで終わっているような印象を受ける。出合からキバ岩の左側の側壁を右に見ながら登ると、間もなく小さな草付のルンゼを右に分ける。この小ルンゼは、キバ岩の出合から望む正面壁とはちょうど反対側にあたるコルに達している。Aルンゼは小ルンゼを分けるとすぐゴルジュとなり、チョックストーンのある滝に突きあたる。この滝を越すと、草付の涸沢となって穴毛谷第一尾根から派生している支尾根の草付とブッシュの斜面に消えている。

Aルンゼは、取り立てて問題となるような滝もなく容易なルンゼである。合流点から一時間半。

〔Bルンゼ〕

Aルンゼとの合流点から右のBルンゼに入ると、ルンゼはキバ岩を右側から巻くように左へ曲がっていて、すぐ

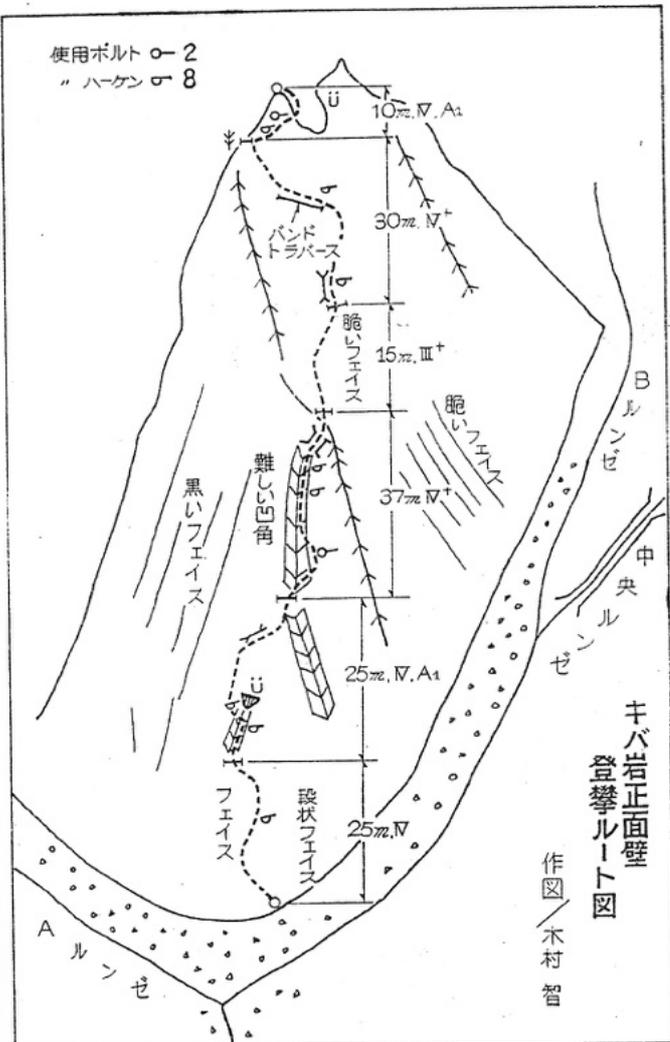
右に中央ルンゼが中央壁と奥壁の間に入り口の滝をかけている。さらに登ると間もなく、ルンゼ全体をふさぐような形の滝が現れる。正面はハンクしているが、左からまわり込むようにして登ることができる。この上からは草付の急な涸沢となっていて、すぐ二つに分かれる。

左の沢はすぐ草付とブッシュにおおわれ消えてしまう。右の沢は、右に急にカーブしており、草付の涸沢が続く。しばらく登ると左側に岩峰が現れ、沢はこの岩峰の右端のブッシュ帯に突き上げている。この急なブッシュ帯を登りつめると主稜線に出る。

〔中央ルンゼ〕

中侯の各ルンゼの中で唯一の登攀の対象となるのがこの中央ルンゼである。登られた記録のほとんどない中侯の岩場で、この中央ルンゼだけは今まで何パーティーかに登られたようである。奥壁と中央壁の間に食い込んでいるルンゼで、遠くから眺めると、奥壁と中央壁を二つに分けているのが明瞭にわかる。

AルンゼとBルンゼの合流点からB



キバ岩正面壁
登攀ルート図

作図 木村智

〔キバ岩〕

キバ岩はAルンゼとBルンゼに挟まれるようにそそり立っている高距一〇〇呎ほどの岩峰である。頂上は二つのピークに分かれていて正面から見ると奥のピークが少し高い。

正面壁の登攀ルートは、中俣本谷側に面している黒っぽいフェイスから取りつき、途中からBルンゼ側に出て最後は手前のピークに達するものである。

登攀ルートとして考えられるのは、この他にA、Bルンゼ側側フランケがある。Aルンゼ側は上部に大きなハンク帯を持った垂壁を持っている。

これに対してBルンゼ側は傾斜も緩くて登攀距離も短く、簡単そうである。ただし正面ルートの一部もそうであるように、岩質が脆いので注意が必要である。

●キバ岩正面壁登攀

一九八二年八月十四日

パーティー 木村智、二階寿人

キバ岩は、三ッ俣にある岩小舎あたりから眺めると、中俣の奥にそそり立っていて非常に登攀意欲をかき立てる岩峰である。私は何回かの「二ノ沢通り」をするうちに、このユニークな形をした尖塔を登ってみたいと思うようになっていた。

今回、木村とこのキバ岩を登攀することになった。というのは、右俣、本谷は「ドリユ状岩壁」や「ドーム壁」等のルート開拓の度に足を踏み入れ、われわれにとってなじみ深いところであったのに対し、中俣はまだ登ったことがなく未知の部分であったからである。中俣の全貌を明らかにすることは、われわれにとって一つの課題であった。

ベースキャンプである岩小舎を八時二〇分出発。空は曇ってはいるが雨の心配はない。中俣を登っていくとゴルジュ帯になり、五層から一〇層のいくつもの滝をフリーで越えるとキバ岩の基部に着く。

一〇時登攀開始。一ピッチ目は段状のフェイスであるが、浮石が多くその上ホールドには砂が乗っていてザラザラだ。技術的な難しさとは異なった精

ルンゼに出合に立つと、ほぼ正面に中央ルンゼの出口を望むことができる。Bルンゼはキバ岩の基部を右側から巻くようにして左に曲がっているが、この曲がってすぐのところ右側から急激に落ちていくのが中央ルンゼである。このルンゼの入り口には滝が掛かっているが、これを左壁つまり奥壁側の壁から登ると、一ピッチ四〇呎で広河原に着く。

一状を呈し、途中にチョックストーンがいくつか掛かっている。ここをほぼ右壁通しに二ピッチ登ると、傾斜は緩くなり、ルンゼは大きく開けて左へ曲がる。最後の草付帯を慎重に登ると奥壁と中央壁の間のコルに出る。

登攀対象となるのは入り口の滝とチムニー状の登りの計三ピッチで、グレードとしては、Ⅲ級十、一部Ⅳ級というところである。

F1から稜線まで三時間。

神のないやらしきがある。

二ピッチ目、かぶり気味の出だしを人工で越える。岩は大まかで見ただしは何でもないようなところが、実際に登ってみると、非常に苦勞する。

三ピッチ目、上に向かって続いていく顕著な凹角の岩壁から登り出す。途中ボルトを一本打ち、左上するクラックから凹角に入る。ここの出口は完全なチムニー登りとなる。

四ピッチ目、脆いフェイスをだましまし越えようと傾斜が緩くなりリッジ状になる。しかし、このリッジも浮石や砂が乗ってザラザラで、あいかわらず神経をつかう登攀だ。緩傾斜のリッ

ジの末端からまた傾斜の強い垂壁が現れる。

五ピッチ目、出だしを人工で越すと小さな松の木が生えていて、ここから左へトラバースして尖塔の基部に着く。キバ岩の尖塔は二つに分かれていて、

右の尖塔の方が左より高いが、岩質が非常に脆くてボルトの連打となることは必至であろう。今回は左の尖塔を登ることにする。

六ピッチ目、ハーケンとボルトを使って人工で一〇層登り左の尖塔の頭に出る。一四時一五分終了。

下降は二回のアップザイルンでBルンゼ側を下る。下降途中、ザイルがひっ

かかって回収不可能となり、登り返して何とか回収するというおまけがついてしまった。(記・二階寿人)

〔奥壁〕

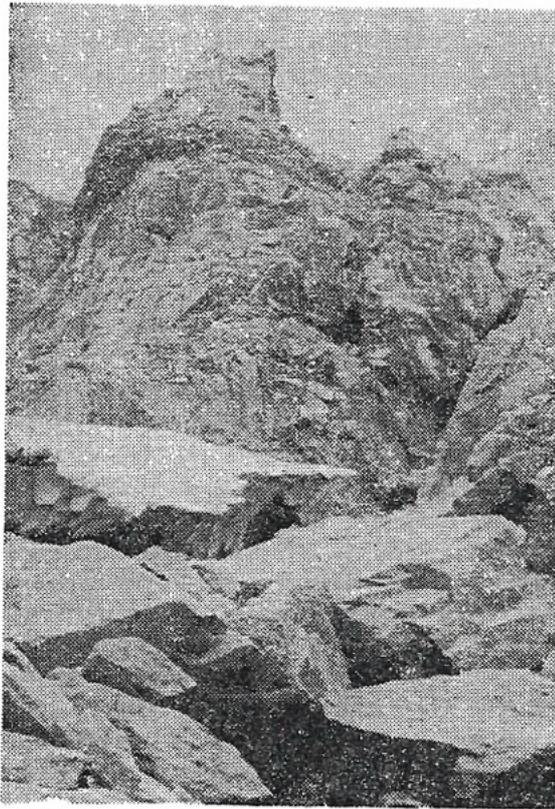
奥壁は、幅二〇〇層、高距二〇〇層を有し、中俣で最大のスケールを持った岩壁である。中央ルンゼの入り口の滝を越えて左へ奥壁ルンゼが分かれるところが取付である。奥壁には既登ルートが一本あるが、他に何本かの登攀可能なラインが引けそうである。われわれはまだ登っていないので、今後の課題の一つである。

〔ピナクル尾根〕

AルンゼとBルンゼの合流点からBルンゼに入ると、ルンゼはすぐ中央ルンゼを右に分けて左へカーブしている。このBルンゼの右手に、一〇〇層程度の岩峰が三つ連続しているがこれがピナクル尾根である。

ブッシュが若干目立つが部分的に垂壁があり、三つのピナクルを連続して登ればおもしろいルートになると思われる。

〔文責・二階寿人〕



中俣・キバ岩正面壁

八ヶ岳町営

権現小屋青年小屋アルバイト男女数名募集致します。

4月20日頃から11月10日頃まで、又7月20日頃から8月30日まで

男は10日に1回ぐらいボッカがあります。履歴書・写真・電話番号を御送り下さい。

〒409-16 山梨県北巨摩郡小淵沢町7581 宮沢源治
TEL 055136-2863

会員募集 愛知岳連加盟

- 当会は、夏の尾根歩きから冬の登攀までオールラウンドな山行を行っています。
- 初心者、大歓迎親切に指導します。
- 年齢30歳迄、経験、性別は問いません。

春日井市坂下町5丁目1215-411 ☎0568(88)3332 高坂国夫
春日井市藤山台3-1-3(344-203) ☎0568(92)2784 鮎沢清次

春日井山岳会